

文部科学省教育関係共同利用拠点事業
第8回森林フィールド講座・沖縄編
～世界自然遺産の森、人と生きものの暮らし～
報告書

1. はじめに

北海道大学北方生物圏フィールド科学センター森林圏ステーションは、平成24年7月に文部科学省教育関係共同利用拠点（「フィールドを使った森林環境と生態系保全に関する実践的教育共同利用拠点」）に認定され、平成29年度、令和4年度より同一拠点名称でさらに計10年間の再認定を受けた。これは北海道大学（以下北大）が所有する研究林フィールドや施設（7ヶ所、約7万ha）を実習や調査研究利用といった形で全国の他大学の学生に広く利用してもらい、森林フィールドを活用したより高度な教育活動を支援する事業である。加えて、山形大、筑波大、信州大、高知大、琉球大（以下連携大学）の演習林とネットワークを結ぶことにより、北大が単独で実施することが難しいような広域かつ多様な森林をカバーした教育プログラムを提供している。その一環として、大学や学部・学年を問わず、あらゆる大学生・大学院生が参加可能な合同実習「森林フィールド講座」を2014年度から開催している（表1）。本年度は、9月に第8回を、琉球大学農学部附属亜熱帯フィールド科学教育研究センター 与那フィールドで開催した。本稿ではこの実習について報告する。

表1 これまでの森の開催時期と場所

時期	場所
第1回 2014年8月	北海道大学 和歌山研究林
第2回 2015年8～9月	琉球大学 与那フィールド
第3回 2016年9月	信州大学 アルプス圏フィールド科学教育研究センター
第4回 2017年9月	筑波大学 山岳科学センター井川演習林
第5回 2019年2月	山形大学 農学部附属やまがたフィールド科学センター 上名川演習林
第6回 2019年9月	高知大学 嶺北フィールド
第7回 2022年9月	北海道大学 雨龍研究林

2. 実習の概要

- ・開催日：2023年9月19日（火）～9月22日（金）
- ・開催地：琉球大学農学部附属亜熱帯フィールド科学教育研究センター 与那フィールド
（〒905-1427 沖縄県国頭郡国頭村与那685）
- ・参加費：7,000円（食費・滞在費含む）

・概要：亜熱帯の森林の特徴や種ごとに異なる生存戦略、人の利用による森林への影響や生態系保全の取り組み、その土地ならではの付加価値を生み出す新しい造林研究などについて学ぶ、初学者向けの内容とした。

3. 受講者

6月に全国の国公立・私立大学のうち、自然科学あるいはフィールドワークカリキュラムを組んでいる理系の、あるいは自然と人間との共生を教育理念に挙げている文系の約410学部・学科にポスターを送付するとともに、本実習専用ホームページ

(<https://www.hokudaiforest.jp/ffp/>森林フィールド講座詳細/)を公開することで参加学生の募集を開始した。ホームページでは募集開始時点で決まっていた大まかなプログラムを紹介するとともに、このようなフィールド実習に参加したことのない初学者に対して服装、準備項目などを解説することで興味を持つ学生の積極的な参加を促した。この結果、新型コロナウイルス感染症対策として例年の3分の1ほどに設定した定員(16名)に対して、募集期間(6月2日～7月12日)の約1か月強で71名の応募があった。申込時のアンケート(複数回答可)によると、応募したきっかけはポスターが52名、ウェブサイトが3名、教員からの紹介が10名、友人知人からの紹介が12名と、例年同様にポスターによる宣伝の効果が大きかった。同様の実習に参加する機会などを考慮した選考を経て男女各8名、合計16名の参加者を決定したが、新型コロナウイルス感染症などの影響で最終的に参加した学生は14名だった。参加学生の内訳は、男性7名—女性7名、理系9名—文系5名、学部1年4名、2年3名、3年3名、4年4名だった。

4. 参加スタッフ

本実習は連携大学との合同開催であり、連携大学の教職員が全期間あるいは一部期間、実習スタッフとして参加した(教員4名：琉大2名・信州大1名・山大1名；技術職員5名：琉大4名・高知大1名；研究員1名：北大1名；事務・用務スタッフ2名：琉大2名)。筑波大学からも職員が派遣される予定であったが、体調不良により参加を見合わせた。琉球大学の教職員が主導して、森林観察や自然・環境に関する施設見学などの主な内容を実施した。各連携大学スタッフは、2日目の夜の演習林や研究についてのプレゼンテーション担当と昼間の活動中の参加者のサポートを行った。また、琉球大学の大学院生2名がティーチングアシスタントとして参加した。

5. 実習内容

1日目：9月19日(火)

13:30	ゆいレールでだこ浦西駅 集合 (一部教職員を名護市民会館でピックアップ)
13:40~16:00	バスで移動
16:00	与那フィールド 入所
16:30~17:30	ガイダンス・講義

18:30～19:30	夕食
19:30～20:30	宿舎周辺の夜の森の観察

昼、ゆいレール・てだこ浦西駅に集合し、大学のマイクロバスで与那フィールドまで移動した。移動中は琉大の高嶋先生が、沖縄の地理や景観について解説を行った。入所後の講義では、亜熱帯林の特徴や、やんばるの森と人とのかかわり、与那フィールドについて高嶋先生・松本先生による解説があった(写真 1-1)。夕食後は、やんばるで生物調査およびネイチャーガイドツアーを行っている Yambaru Green のスタッフの解説による夜の森の観察が実施された(写真 1-2)。



写真 1-1 松本先生の講義



写真 1-2 夜の森林観察・出発前

2 日目：9 月 20 日(水)

7:30～8:30	朝食
8:30～11:30	与那フィールドの森林観察①
11:30～13:00	昼食
13:00～17:30	やんばるの自然・環境の見学①
18:30～19:30	夕食
19:30～21:00	演習林紹介

午前中の与那フィールドの森林観察①では、前夜歩いた与那フィールド周辺の森の昼間の様子を観察した(写真 2-1)。琉球諸島の成り立ちと植生との関係、樹種ごとの特徴と地域の人々による利用、それによる生態系への影響、希少な野生動物の保全と森林利用の両立の難しさなどが解説された。



写真 2-1



写真 2-2 ウフギー自然館(TA 撮影)



写真 2-3 鏡地海岸



写真 2-4 辺戸岬



写真 2-5 里山研究園

午後のやんばるの自然・環境の見学①では、野生生物保護センター・ウフギー自然館、鏡地海岸、辺戸岬、琉球大学・里山研究園を見学した(写真 2-3、4、5)。ウフギー自然館では、スタッフの方からのやんばるの生態系を守る取り組みについて、里山研究園では、生態系を保全しながら付加価値を生み出す新しい造林についての解説があった。

3 日目：9 月 21 日(木)

7:30~8:30	朝食
8:30~12:50	与那フィールドの森林観察②

12:50～13:40	昼食
13:50～17:50	やんばるの自然・環境の見学②
18:30～19:30	夕食

この日は、天候を考慮して午前と午後の予定を入れ替えて実施した。午前中の与那フィールドの森林観察②では、微気象観測タワーサイトと世界自然遺産登録地で森林を観察した(写真3-1、2)。タワーサイトではヘルメット・ハーネス着用などの安全に配慮しながら、少人数ずつタワーに登り景観を観察した。また、亜熱帯の森ならではの樹種ごとに異なる生存戦略などについての解説があった。伐採履歴のほとんどない世界自然遺産登録地では、タワーサイトの森林との違いを観察し、人と森との付き合い方についての解説があった。午後のやんばるの自然・環境の見学②では、ヤンバルクイナ生態展示学習施設「クイナの森」と東村ふれあいヒルギ公園(慶佐次川のマングローブ林)を観察した。



写真 3-1 微気象観測用の器材を紹介する松本先生

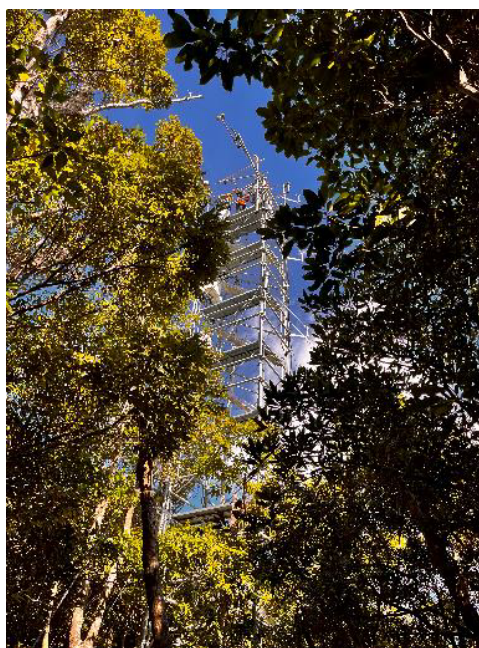


写真 3-2 微気象観測タワー



写真 3-3 世界自然遺産登録地



写真 3-4 東村ふれあいヒルギ公園

4 日目：9 月 22 日(金)

7:30～8:30	朝食
8:30～9:50	レポート作成・発表
9:50～10:15	清掃・片付け
10:15～12:30	バス移動
12:30	ゆいレール・てだこ浦西駅 解散 (一部参加者は名護市民会館付近で下車)

朝食後、実習を通じて学んだことなどの感想をレポートにまとめ、発表した(写真 4-1, 2)。その後、高嶋先生より、一人一人に受講証明書を手渡された。部屋の清掃、寝具の整理などの後、ゆいレール・てだこ浦西駅まで大学のマイクロバスで移動し、解散した(一部参加者は名護市民会館付近で下車)。



写真 4-1、2 レポート発表

6. 参加学生の反応

後日、参加者アンケート(Google フォームで作成)を行い 12 名の回答があった。アンケート結果によると、実習全体の感想としては、全員が「期待以上」「期待通り」「概ね期待通り」と

回答し、概ね好意的な意見だった。自由記述式で、印象に残ったプログラムなどの感想を求めたところ、タワーサイト見学(2件)、沖縄の林業や環境に関する課題(3件)、植物の生存戦略(2件)、マングローブ林(1件)、夜の森の観察(4件)について触れた回答が得られた。一方で、プログラムの内容に関する具体的な意見として、かなり満足したと述べた上で、以下のような記述があった。

- ・ 沖縄の産業や日常生活の中での自然との関わりについて、現地の人から話を聞いたり実際に様子を見れたら、人と自然との共生についてより考えを深めることができた
- ・ 環境省ビジターセンターで環境に対する社会・行政的取り組みや森と伝統民俗文化の関わりを学べたのが非常に良かったが、森と伝統民俗文化の関わりについては、展示の見学のみで若干物足りなかった。森と人との共生が重要なキーワードであった本講座において、森と共生していた伝統的生活や森への伝統信仰について学ぶ機会が少なかったのは勿体無いと感じている。
- ・ 演習林紹介の時間は、各地の森林研究を知れて興味深かったが、各地で行っていることを聞いただけであり学びがなかった。

上2点の意見については、今回の参加者には文系学生も多く、森と人とのかかわりというテーマに強い関心を持つ参加者が多かったためと考えられる。最後の意見については、研究林あたりの持ち時間の少なさなどの制約もあるが、例えば、学術的・社会的・教育的意義などにふれつつ活動紹介をするなど、学びへの意欲の強い学生たちのための工夫が可能だと考えられた。

プログラムの時間配分についても、全員が「適切だった」または「概ね適切だった」と回答した。しかし、時間配分に関する具体的な感想として、それぞれの見学地での時間をもう少し長くてもよかった、あるいはもう1日日程の長いプログラムでもよかった、という回答が5件寄せられた。もう少し時間をかけたかった場所としては、世界自然遺産登録地、ヒルギ公園(マングローブ林)、海が挙げられた。

食事や宿泊施設などの生活面については、一人が「普通」と回答した以外は、11人が「良い」「とても良い」と回答した。具体的な感想や改善点としては、寝具(ベッドマット)の薄さを挙げた回答が2件あった。よかった点としては、各部屋にWi-Fiがなかったため、あるいは食事は当番制で自炊したため、参加者同士で集まる機会が多く打ち解けられたという回答(2件)や、限られた予算ながら、地元食材も取り入れ楽しみも考えて用意された温かい食事を喜ぶ声が複数件寄せられた。

最後に、本講座で設定されたテーマが、社会科学とのつながりのあるものだったためと思われるが、文系学生の応募も多かった。全体的な感想として、理系・文系のさまざまな専門分野を学ぶ学生と共に過ごしたことについて、視野が広がった・刺激になったという回答が4件あった。